
幼馴染は狼で狂戦士

餓鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幼馴染は狼で狂戦士

【Nコード】

N2295Y

【作者名】

餓鬼

【あらすじ】

もし、佐藤や著我に幼馴染みがいて狼だったのならなお話し

キャラ崩壊などがありますので原作のキャラのままが好きなお人はお戻りください

プロローグ（前書き）

ただの思いつきですが暖かい目で見守って下さい。

プロローグ

夕方、一つのスーパーのお菓子売り場に一人の少年が来ていた。

「今日は『氷結の魔女』（ひょうけつのみまじょ）は居ないか」

少年はお菓子を手に持ちながら呟いた。しかし、少年の視線は弁当売り場に向けられていた。

「ジジ様が貼り終えたし、暴れますか」

少年は眼鏡を胸ポケットにしまい弁当売り場に走って入った。

「今日は骨のある奴は居るか！」

少年は吠えた。

「おら！」

一人の男が少年に殴りかかったが簡単に避けた。

「威勢は認めるが弱いな」

少年は男を殴り飛ばした。

「何だよ、あいつは」

一人の男が殴りかかったのをきっかけに次から次へと少年の元に男が集まってきた。

「協力プレーでエすか、俺には勝てねエよ」

数は十人か弁当は五個、月桂冠は無し、二分で片付けるか。

少年は疾風の如く男たちを抜き去った。

「逃げられたか」

男の一人が呟く。

「残念ここに居るぜエ」

少年は自分も重い男を片手で持ち上げ床にたたきつけた。

「こんな奴に構わずに弁当をとるんだ」

耳にピアスを付けている男が言うと、他の男たちは弁当に向かって走っていったが少年によって全員は倒された。

「今日は豆腐ハンバーグ弁当にするか」

少年は弁当をとると何も無かったかのようにレジに歩いて行った。

「あ、あれが『疾風の狂戦士』（しつぷうのバーサーカ）かよ」
倒れていた男は力尽きる前に呟いた。

スーパーの外では少年が夜の空を見ながら言った。

「明日は何所の地区に行こうかな」

少年は眼鏡を掛け直し帰っていった。

キャラ設定（前書き）

思いつきで書いたものなので暖かい目で見てください

キャラ設定

名前：緋音^{あかね} 權莉^{かいら}

二つ名：『疾風の狂戦士』

性別：男

容姿：上の中で髪は真っ白で普段は伊達眼鏡を掛けていて生徒会に居る真面目なイケメンに見えるが戦闘になるとブレザーに眼鏡を締まって口調が悪くなる為周りからは好かれてはいない

交友関係：佐藤洋と著我あやめとは小さい時から友人で中はとつても良い。

家族構成：父と母は高校入学と共に他界。妹は心臓に病気をもちドナー待ち。

二つ名の由来：狼の一人が自転車を爆走していたのを見て疾風のように速かったためその名がついたが以前は『鮮血の王』と恐れられていた。狂戦士は狂ったかのような戦闘のスタイルから来た。噂では『帝王』『魔術師』の次に強いと言われているがその強さは今は不明だ。

戦闘スタイル：普段は足と拳だけで戦うが敵によっては割り箸やカゴなどを利用するが物を使うと右に出るものはいない。

好きな物・人：半額弁当、妹、友人、著我

嫌いな物・人：大猪、嘘つき、弱い物

設定が増えましたら書き足します

帝王（前書き）

思いつきで書いたものなので暖かい目で見守って下さい。

帝王

僕が学校に行くところには残念な友人が居た。

「どうしたんだい、その怪我」

ちくわを食べていた彼は顔を上げて話した。

「それが覚えてないんだよ。スーパーに行ったところまでは憶えてるのにな」

彼は佐藤洋、僕の学校の数少ない友人の一人。

「スーパーに行つてその怪我はないと思うけど……」

僕は頬をかきながら言った。

「權莉は信じてくれないのか？」

「信じたいけど、何だか嘘に聞こえるんだよね」

僕は分かっている。なぜ、彼が怪我をしたのかスーパーに行つただけで怪我をしたのか。

「やんちゃしてるのはいいけど無茶はしない方がいいよ」

「今日も行つてみようと思うんだけどな」

「また、怪我すると思うけどな」

僕は苦笑いをしながら言った。

「あそこで何が起きたのか思い出したいんだよ」

「それなら、気よ付けなよ」

「え、一緒に行つてくれないのか」

その言葉は意外だったよ。

「今日はバイトのシフトが入ってるんだよ」

「バイトなんかしてるのか」

「お金が足りないからね」

洋は僕の親が亡くなっていることは知らない。

「僕も仕送りが少ないんだよな」

「お金が少ないと僕等学生は生きていけないからね」

今日はお昼の弁当が無いからもっと過酷なんだよね。

「それより、今日も昼飯食べないのか」

「まだ朝なんだけど」

「いや、お昼一緒に食いたいと思って」

「お金が勿体ないからいいや」

「今月はピンチなんだよ。お金を余分に使ってられないんだよ。」

「この金の亡者が」

「はあ、そんなこと言ってたらどうなるか知らないから」

「僕は笑いながら拳を構えてみた。」

「僕が悪かったからその拳をおさめてください」

「分かったよ。でも、これだけは言っておくよ」

「僕は真剣な目で洋を見た。」

「なに？」

「スパーには行かない方がいい。これを決めるのは洋自身だけど、忠告はしたから」

「洋は頭に？を浮かべながら考えていた。」

時は夕方

「時間があつて西区に来てみたけどあなたに会うなんて意外ですね
僕の目の前には白いコート羽織った大柄の男が立っていた。」

「お前が噂の狂戦士か」

「男はニヤリと笑いながら話を続けてきた。」

「実はお前の実力を聞いて来てみたんだが検討違いだな」

「おいおい、人を見かけで判断するなよ。帝王」

「俺は眼鏡を外し、男の顔を見ながら笑った。」

「良い度胸じゃねえか」

「てめエこそ、体だけでしたなんか言わせねエぜ」

「かかつてこいよ」

その時、半額神がシールを這い終えて戻って行った。

「バトルの時間だア」

俺は弁当売り場の近くに居た男を帝王に向け殴り飛ばした。

「ほお、それがお前の武器か」

男は余裕な態度で聞いてきた。

「それはなア、見てからのお楽しみだア！」

そこから素早く割り箸を四本取った。

「そんなこともできるのか、新人」

「あアん、俺はなそこら辺に居る三下の犬共と一緒にするなよオ」

「威勢だけは認めてやるよ」

男はカゴで攻撃を防いだ。

「ここからが俺様の時間なんだよ」

俺は四本の割り箸を器用に使いながら攻撃を仕掛けているがどれも上手く防がれる。

「本気でこいよ。犬」

俺はブチ切れた。

「誰に向かって言ってるんだア！」

四本の割り箸を投げフェイクに使った。

「そんな攻撃」

カゴで防御の体勢に入ったのを見て、素早く相手の横に走りこんだ。

「名は伊達じゃないな」

「褒めるなよ」

俺は殴りかかったが相手も簡単には殴らしてくれないのか、割り箸の攻撃をカゴで防ぐ事を止め、こちらの方に体制を整えた。

「吹き飛ばせ！」

俺の拳はカゴを吹き飛ばしたただだった。

「やるな」

「褒めるなよ」

そこからはただの殴り合いになったが相手の方が力強いせいからこちら押されていた。その時、男は口を開いた。

「弁当は残り二つだ」

俺はこいつが何を言うのかが分かった。

「共闘でもするか」

「乗ってやるよ」

俺は男との戦闘を止め、残った弁当を手に入れるために他の連中を潰しにかかった。

「おい」

二人とも弁当を買い終え、俺が帰ろうとしたら声を掛けられた。

「何だよ」

俺は戦闘中の口調で返した。

「お前は面白いな」

男は笑いながら言った。

「お前もな」

俺も笑った。

「お前、俺の計画に参加しないか」

「計画？」

「そつだ、お前が必要な物だって知ってるんだぜ」

男はそう言って、一枚の紙を出した。

「それをどこで」

俺は焦った、誰も知らに事をこいつが知っていたから。

「どうだ？」

「拒否権は俺にはないだろ。良いだろ、だかな一回だけだ」

「これが俺の連絡先と部下の番だ持ってる」

俺は男と赤外線連絡先を交換した。

「俺の名前は遠藤 忠明だ」

「俺は緋音 權莉だ」

俺達は握手をしてその場から去った。

「バイトに送れるかも」

俺は携帯のディスプレイを見ながら呟いた。

帝王（後書き）

これで、二巻の介入作戦は成功しました！

ガブリエル・ラチエット（前書き）

思いつきで書いたものなので暖かい目で見守って下さい

ガブリエル・ラチエツト

昨日のバイトは走り込みセーフだったが、オーナは「たまには遅刻ぐらいしろ」と怒られてしまった。コンビニのバイトも終わり寮に帰ると思うがここから違うバイト先に向かった。

「来ましたよ」

僕は今は古い横にスライドさせる扉をスライドさせ中に入った。

「一分も遅刻してないね」

女の人は時計を見ながら呟いた。

「僕の分はコレですか」

僕は新聞の山を指さしながら言った。

「残念ながら今日からこつちよ」

女の人が指したのは二地区分の新聞だった。

「多くないですか？」

僕は新聞の山を見ながら言った。

「往復すれば問題なし」

体力がもつわけないよ。

「大丈夫、君のは今日からMTBだから」

女の人は奥の部屋から整備されたMTBを持ってきた。

「これで行くんですか」

見た目は普通だがこれは2、3年前の物だと一瞬で分かった。

「よろしく」

女の人は新聞の山を四つにわけ、その二つを僕に渡した。

「命運を祈る」

死亡フラグを建てないでほしい。

「分かりましたよ」

僕は新聞の山を青い袋の中に詰め、MTBにまたがった。

「行きますか」

MTBはすぐに加速して、車に負けないスピードで駆けて行った。

「本当にあの子は足だけは怪物ね」
女はたばこを口にくわえながら呟いていた。

朝の新聞配達が終わりに学校に来たら、洋の怪我が増えていた。

「スーパーに行ったのかい」

洋は元気のない顔頷いた。

「何があつたの？」

「言っても信じないからいいよ。それより、權莉も怪我してないか」
洋は僕の左頬の貼ってあるシップを指差した。

「バイトで堅い物にぶつかつたんだよ」

それは嘘だこれは帝王の拳が当たった場所だ。

「痛そうだな」

「今は痛くないけど、そのうち洋もたくさんできるから覚悟してると良いよ」

「意味が分からん」

「今は分からなくていいよ。まだね」

僕はそのまま席に着き放課後まで授業を受け西区に足を運んだ。

「君が僕を呼んだのかな」

スーパの近くに片方にピアスを付けた男が居た。

「お前が狂戦士か」

「君がガブリエル・ラチエツトかい。思ったより普通だね」

「お前こそ、思ったよりひ弱に見えるな」

僕はニヤリと笑いながら言った。

「それで、俺に何の用だ？」

「お前に俺達の為に仕事を何個かやってもらいたい」

「話を聞こうか」

男は一枚の紙を渡してきた。

「コイツはお前の幼馴染みなんだろ」

その写真は金髪で眼鏡を掛けた女だった。

「そうだな、それで」

俺は男を睨みながら言った。

「この女と夕餉の弁当争ってもらおうと思ってな」
断ったら脅して何かが来るな。

「俺に何をしろと」

「勧誘だよ」

「それなら、お前たちでしろよ」

それぐらいは自分たちの力でしろよ。

「お前は自分のエリアが無いのなら別にいいだろ」
エリアなんて俺には関係が無いからな。

「俺はまだ、関わりたくない」

「これはあの人からの命令だ」

「接触するだけじゃ駄目なのか？」

「それも考えているが戦闘を一回した方が相手も納得がいくだろ」

「俺にはそんな戦闘力なんてないぜエ」

「俺の目には嘘は通用しないぜ。それにお前が参加しないならあの話は無かった事になるぜ」

「っ！」

嫌な連中だな。

「場所はここだ」

俺は地図を貰い嫌々頷きスーパーがある場所に向かって歩き出した。

「俺ってこんなことの為にこんなことを始めたんだっけ」

そんな事を呟きながら歩いて行った。その後ろでは男が呟いた。

「駒は駒らしく頑張ってくれよ」

ガブリエル・ラチエット（後書き）

二巻の内容に入る前に『湖の麗人』が出てくることになるとは一生の不覚！

湖の麗人

俺はスーパーに来たがなんだかすごい目で見られている。

「（このマスクはそんなに目立つか？）」

俺はタイガーマスクを被っています。このマスクはカッコいいだろ！ そんな事より時間までに麗人が来ているか探しておくか。

「あ、アイツ誰だ」

「あんなマスクいまだきするのかよ」

やっぱりこれは駄目なのか？ それより、いた！

「（今は声はかけれないが終わってから話しかけるか）」

俺は女性の半額神通称マっちゃんがシールを張り終え戻るときに一礼をしていた。

「（さて、行くか）」

俺はいつもは声を張り上げるがそれをしたら一瞬ではれてしまうので無言で暴れることにした。

「この、マスク野郎」

後ろから男が殴りかかってきたがそれを簡単に避けそのまま顔に膝を打ちこんだ。この連中は弱いな、早く麗人と接触しないとな。

「雑魚は引っ込んでろ」

俺は小さく呟きながら周りの犬共を蹴散らしていった。

「あんた、何者」

ここで、著我がこちらに来た。ばれないように声を変えた。

「私は何者でもない、ただの狼だ」

そう言っつて、著我との距離を縮めて鳩尾に殴りかかったが割り箸でその拳は止められた。

「やるな」

「それはどうも」

割り箸で拳を弾かれて片手がフリーになった。

「そこ」

著我は大勢を低めて足払いをしてきたて俺はそれをわざと受けた。大勢を崩された俺はそのまま床に顔から落ちかけたが床に片手をつけて回転蹴りを繰り出した。

「上手い」

俺はにやけながら片手をばねにして両足を縮め飛び起きるとともに蹴りに繋がれた。

だがそれも割り箸に止められたが足に自信がある俺にはそれでは防ぐことは出来ない。そのまま割り箸を折った。

「おやすみ」

着地と共に彼女の鳩尾に蹴りを入れ気絶させた。

「これで、良かったのか」

俺は弁当を一つとり、会計を済ませてスーパーの奥に向かった。

side out

私は意味が分からないマスク野郎と戦ったがその男は私より強かった。アイツは手加減をしていた。私には分かる。

「ここどこ」

私が目覚めるとそこは私に知らない部屋だった。

「目覚めたか」

ふと声のする方を見たらマスクの男が椅子に座っていた。

「あんた、何者？」

「声で分かってくれたら嬉しかったよ」

男はマスクを脱いだ。

side out

俺はマスクを脱ぎ捨てた。

「久しぶり」

顔から一滴汗が零れ落ちた。

「權莉？」

「正解です」

俺はブレザーから眼鏡を取り出し掛け直した。

「本当にあれがあんたなの」

「嘘をついてもしょうがないよ」

僕はマスクをしまいながら立った。

「目覚めたのなら出ようか。ありがとございませすマっちゃん」

僕は著我が立ったのを確認して裏口から出て近くの公園に行った。

「なに」

さっきの事もあり警戒されている。

「警戒しなくていい。あやめに言いたいのはガブリエル・ラチエツ

トに協力して欲しい。僕的には関わってほしくない」

「協力？」

「西区の狼を集めて東区に戦争を仕掛けるみたいだ」

「権莉は東区の狼じゃないの」

「僕は何所にも属さないんだよ」

「マっちゃんと一緒か」

警戒が無くなりいつものように話が出るようになった。

「僕は今回は無理やり参加させられているからあやめだけには忠告

しておくよ」

「無理やりなら断ればいいのに」

「それが出来れば後悔しないよ」

僕は空を見上げながら言った。

「何か弱み握られたの？」

「アイツらがあそこまで僕の事を調べていたのは不覚だよ」

「そんなにヤバいの」

著我は心配そうに聞いてきた。

「これはあんまり人に言いたくないから、明日の放課後ここに来たらわかる」

僕は著我に一つの病院の住所が書かれた紙を渡した。

「なんで、病院」

「来たら分かる。僕は今からバイトだからここで」

僕はベンチから立ち、ゆっくりと出口に向かって歩いて行こうとしたら著我が叫んだ。

「マスクは無いと思うよ」

僕はその場にこけそうになったが遅刻しそうだったけど気分は最悪だ。明日、洋で発散しようか。

次の日学校に来てみると、洋は白梅さんに叩かれていた。その洋は僕を見て助けに来てくれと訴えてきた。

「どうしたんだい、白梅さん」

僕は横から二人の会話に混ざった。

「おはようございます。緋音君」

「おはよう。白梅さん」

洋は僕が来て一安心していたがここから楽しい時間だよ。

「白梅さん、洋を苛めたいのならもっときつくした方が良いでしょう」

その言葉に洋は固まった。

「この教室窓からヒモなしバンジーをさせたらいいと思うよ」

「お前は僕の敵か！」

洋は叫んだ。

「僕は人を苛める時は徹底的に決まってるんだよ」

笑顔で答えた。

「ドSだ」

洋は何かを呟いたが僕には全部聞こえてるんだよ。

「それは僕にとっての褒め言葉だよ」

「う、嘘だよ。嘘だと言ってよ。う、内本君助けて」

僕は後ろを向いてニッコリ笑って

「助けなくていいよ」

「白梅さん、これは苛めだよ。助けて下さい」

「緋音君、殺したら犯罪ですよ」

「安心して下さい。半殺しで止めますから」

「それって、ほとんど死んでないかな？」

「気のせいだよ、気のせい」

この後、学校に洋の悲鳴が学校に響いた。権莉は洋を殴ってる間ずっと笑っていた。

バイトの理由（前書き）

学校が代休だと書くのにもってこいの時間がたっぷりです。
明日からの学校が嫌になる！ 授業中は小説しか読まないけど

バイトの理由

学校も終わり僕は近くの本屋で女の子が読む少女雑誌を一つ買い病院に向かった。

「元気にしてたか」

軽い口調で病室の扉を開くと小さな女の子がベットのの上に座っていた。

「お兄ちゃん、来てくれたんだ」

そこに座っているのは僕の唯一の家族の妹だ。

「これ、買ってきたけど読む？」

俺は紙袋に入った雑誌を渡した。

「ありがとう。お兄ちゃん」

妹はいつもこう言って笑ってくれる。

「今日は体調は大丈夫なのか？」

「お兄ちゃんはいいつも心配してくれるけど、平気だよ」

平気な物かお前は心臓が悪いんだぞ、ドナーを待ってる意味が分かっているからそんな事が言えるんだ。

「それならいいけど」

「お兄ちゃん学校楽しい？」

「面白くないよ、暇すぎて寝てるよ」

寝ているのはバイトで寝る時間が無いためだ。

「勉強しないとダメだよ」

「寝てても理解できるから良いよ」

学校の勉強は教科書を覚えたら簡単だ。

「むう、お兄ちゃんはいいつもそればっかだよ」

「思い出した、僕たちの引き取り先が決まったよ」

妹は少しだけ気分が悪くなっていた。

「お前がとても懐いていた佐々木さんのところだよ」

「本当！」

佐々木さんご夫婦は音楽家で滅多に日本に帰ってこない人たちだ。

「ああ、おじさんからこの前電話があったんだ」

その時、ドアがノックされた。

「入ってきていいですよ」

妹はドアの向こうに居る人に返事をした。

「失礼します」

入ってきたのは著我だった。

「あやめお姉ちゃんだ」

「久しぶりだね結月ちゃん」

著我は手を振りながら近づいてきた。

「よお」

俺は片手をあげて挨拶をした。

「結月ちゃんは入院していたんだ」

「はい、今年からまた入院しました」

俺は静かに立ち上がり部屋を出ようとしたら結月に止められた。

「どこに行くのお兄ちゃん」

「風に当たりに屋上に行く」

そのまま部屋を出て屋上に向かってから一時間後に著我がやって来た。

「どうだった」

「楽しかったよ」

「そう、良かった」

俺は空を見ながら目を瞑ったり目を開いた。

「話聞いてた」

著我は一瞬おどろいたが答えてくれた。

「聞いたよ」

「どこから」

俺は鋭い目つきで聞いた

「最初から」

「これが俺の弱みだよ」

「へ！」

著我は驚いた。

「アイツの治療費が足りなくバイトして稼いでいるんだけどそれだけじゃ足りなくてそこをアイツらに付け込まれたんだ」

「でも」

「引き取り先が決まっても家族になるのはまだ。結月はもう短いんだよ」

「それってホント！」

「ドナーは一回見つかったんだけど血液に問題があって駄目だったんだ」

「だから、狼になったんだ」

「アイツの治療費を稼ぐにはそうするしかないそれ以外になかった。俺って本当にダメなお兄ちゃんだな」

「そうだね」

「それで、あやめはアイツらに協力するのさ。俺はやめといた方が良いと思うが断ったら他の狼に狙われるから注意しろ。アイツらの頭は帝王だ」

俺は断ってほしかった。ただそれだけを望んでいた。

「協力するよ」

俺はため息を吐きながら携帯を取り出し連絡をした。

「俺だ。麗人は協力するそうさ」

それだけを言って、一方的に切った。

「俺は今日から何日間はバイトが入ってるからスーパーには現れないから」

俺は屋上から立ち去ろうとして立ち止まり言った。

「俺はお前にこの話を断って欲しかった。これだけは言うておくよ俺は君が好きだったよ」

俺は屋上を去った。

「これからは本気でやろうかな」

俺はバイト先のロッカールームで両手両足に着いた重りを確認しながら呟いた。

「まずは、あの薄汚いブタをぶち殺してやる」

ロッカーに重りを締まってゆっくりと扉を閉めた。

「權莉君時間だよ」

レジの方からオーナの声が聞こえてきた。

「分かりました。今行きます」

俺は狼としての誇りをアイツを倒す為に全力を出すことを決めた。

バイトの理由（後書き）

わぁーオリ主が本気になったよ。これは書くのが楽しくなる！

恐怖の生徒会長

体調管理が出来ていなかったため、三日間学校を休みその間の生徒会の仕事が溜まっていく状態だ。

「お、おはよう。白梅さん」

僕は今とっても会いたくない人に出会ってしまった。

「おはようございます。それで、仕事の方は片付きましたか？」

僕は視線を逸らしながら答えた。

「体調が悪くて出来ていないんだ」

「怒っていいですか」

「今日、終わるまで残りますのでぶたないでください」

だがそれは遅く、白梅さんの平手を右頬にくらった。

「おい、ちよつと来い」

俺は少しばかりキレ、校舎の陰に白梅さんを連れて行った。

「なんですか？」

「何ですかだと、人が優しくしてたら調子乗るなよ」

それを言い終えた瞬間にまた平手をまた右頬にくらった。

「ぶちますよ」

白梅は平然と答えた。

「ふ、ふふふふはははは」

權莉は狂ったように笑い出した。

「お前、面白いよ。本当に笑えるよ」

その瞬間に今度は左頬に平手をくらいその手を握って殴られた。

「（この人、普通に強いんですが……）」

權莉は何もできないまま殴り続けられた。

「（殴られてるのにこの感覚なんだ！ 悪くない！）」

この場面を陰に隠れて見ていた内本は同志誕生を楽しんでいた。

「なんで、俺が殴られないといけないんだよ」

白梅が去った後も彼は校舎裏に座っていたら内本が近づいてきた。

「我、同志よ」

最初は意味が分からなかったが洋からの話を思い出しMと目覚めた自分を仲間だと思っただらうが俺は

「ふん」

熱い握手を交わした、あんな良いパンチが気持ちいに決まってるじゃないか。内本はニヤリと笑い「ようこそ」と呟き俺はその言葉を聞き生徒会室に仕事を片付けに行った。

「はあ、なんでこんなに溜まってるんですか」

俺は文句を言いつつ高速に両手を動かした。

「緋音君、ついて来てくれる」

仕事が一段落した時、白梅に声を掛けられ、向かった先は部活棟の5階だった。

「ここに何の用があるんだ」

俺は優等生の口調を使うのが面倒に普通に聞いた。

「部活の申請書を届けに」

前を歩く白梅は静かに言った。

「はあ、副会長なんかならなかったらよかったよ」

そう言ってる間に部室の前に着いきドアを開けた瞬間に目に入っただのは半額シールだった。

「部活の申請書を持ってきました」

白梅はそのまま椅子に座っている先輩に紙を見せた。その横には洋が居たから手を振ったら寄ってきた。

「どうしたんだ権莉」

「生徒会の仕事だよ」

「口調、戻したんだ」

「面倒になったからな。それより、お前はこの部に入ったんだな」
洋は少し嫌な顔になった。

「ほとんど、強制だよ」

「お互い面倒な上司を持ったな」

俺は慰めの言葉と共に洋の肩に手を置いたら隅の方でパソコンを

女子が「この二人は絵になる、神様良い場所をありがとう」と呟いていたのをスルーした。関わりたくないです。

「それにしてもお前が狼になるなんてな」

「權莉は知ってるのか」

「いや、俺はスーパーに行くだけで見たのは数回だけだよ。楽しいか」

洋は真剣な目になり答えた。

「楽しかった」

「そうか、俺もやろうかな」

ボソツと呟いた。

「何か言ったか？」

「いや何も、白梅の用事も終わったから俺は仕事の方に戻るよ」

「ん、頑張れよ」

「ハイよ」

俺は生徒会室に戻る途中、洋ならどの狼よりも強くなるんじゃないかと思った。

「アイツに何か光る物があるな」

アイツのこれからの成長が気になるがこの地区には《ダンドー》に《魔術師》が居るからなそれにあそこに座っていたのが《氷結の魔女》なのか、戦っても見たいな。

「最近行つてなから戦いが楽しみになるじゃねエか」

side out

「先輩どうしたんですか？」

僕は考え事をしている先輩に話しかけた。

「いや、さっきいたのはお前の知り合いか？」

「權莉は幼馴染みですけど」

僕は頭に？マークを浮かべた。

「いや、アイツはすごい奴かもしれないな」

「何言ってるんですか、アイツは昔から体が弱くて激しい運動なん

かしてませんよ」

「その癖に奴の筋肉の付き具合はおかしい」

「そうだろうか、僕は昔から遊んでいたからそこまで見ていないかな。」

接触（前書き）

今回は短いです

接触

あの日から何日たっただろう、俺は未だにスーパーに行っていない。行くのを恐れている。

「何やってるんだろうな俺は」

そんな事を考えていると携帯が鳴った。そのディスプレイには帝王と映っていた。

「何の様だ」

俺は声のトーンを下げて答えた。

『俺が今言う場所に来い』

「はあ、意味が分からん」

『来たら分かる』

俺はそいつの言うとおりにスーパーに来たらそいつは洋の頭を掴んでいた。

「コイツがその火種だ」

帝王が洋を投げようとする腕を俺は掴んだ。

「やりすぎだ、そいつはもう気絶している」

俺は握っている腕に力を入れた。

「お前は裏切るのか」

「はあ、意味が分からねエな。俺は一回お前らの為に仕事をしたんだ約束は守った」

「ちっ、ここで戦うか」

「それはいい。誘いだがお前とは最高の舞台で戦いたいねエ」

俺は回し蹴りを入れたがそれはアイツの足によって止められた。

「戦線布告の合図で良いんだよな」

帝王はニヤリと笑いながら言った。

「残念だったな。俺は野良犬なんぞでな」

俺は足を退きその場から去ろうとしたら魔女に止められた。

「待ってもらおうか」

俺は振り返りその床をよく見るとうちの女子の制服を着ていた洋がいた。

「服か」

俺は鞆の中に入っていたバイトの制服を投げた。

「コイツを貸すよ」

「お前に話がある」

「俺は話なんかないから帰るよ」

「お前はどちらの味方だ」

「どーだろうねエ、俺は野良だからな」

俺は野良の所を強調しながら言った。

「なら我が部に「入らない」」

最後まで言う前に断った。

「俺は野良だから誰ともつるまないし誰とも今後協力する気はない。俺は次の戦いでこの世界から去るからな」

次の日はアイツの手術の日だからな、俺はこの世界からは消える一生な。

「教えて欲しい、なんでそうなったんだ」

著我が話に入ってきた。

「イタリアに行くんだよ」

「イタリア？」

「引き取り先の人が今度イタリアの音楽団に行くことになってな、それについていくことにしたんだよ。ここには何も未練もないからな」

俺は今度こそ出口に向かって歩いて行った。

「あんたまでここに来ているとはな《魔術師》」

バイクにまたがった状態で話し掛けてきた。

「最後の戦いなら俺に協力してくれないか」

「あの豚をやるのか」

《魔術師》は頷いた。

「それなら、俺は最初からやるつもりだった。それにあんたが入っ

たら勝機は確実だと言つてもいいがこれは俺の戦いだ、手を出さないで欲しい」

「いや、アイツに借りがあるのは君だけじゃない」

「分かった、俺はあんたとの協力に乗る」

「ありがと」

その言葉は俺の心に響いた。この言葉は妹以外の口から聞くのは久しぶりだった。

「勘違いするな、たまたま標的が同じだったただけだ」

俺は帰宅した、奴との決着の為に。

裏切り

「ここに呼び出して、何のつもりだ」

俺は朝早くに洋から連絡を受けて公園に行く。他の狼たちが居た。

「お前のところにもこんな紙が来ただろ」

魔女が話しかけてくれたが俺のところには来ていない。

「俺のところにはメールが届いた。内容は『裏切り者にはお灸を添えてやる』だったかな」

あのメールは受け取ってすぐに消したから覚えてないや。

「それに俺はお前らとなんの関係を持たないから帰るよ。これでも忙しいんだよ」

そう言う。他の狼は俺を睨んできた。

「何だ、お前たち俺とやるのか？俺はお前らとはやる気がないから安心しろよ」

その後、学校を休み病院に直行した。

「結月、体調はどうだ」

俺は手術前の結月は笑顔で答えた。

「大丈夫だよ」

その時、病室のドアが開き入ってきたのは佐々木さん夫婦だった。

「どうも」

俺は一礼した。

「まだ、アメリカに居たんじゃないんですか」
俺は疑問をぶつけた。

「今日は手術の日だから来たんだよ」

おじさんはニツコリと笑いながら言った。

「本当は心配でしたんですよね」

おばさんは手を口に当てながら言った。

「ありがとうございます」

俺はまた礼をした。

「もう、そんなよそよそしい態度はとらなくていいよ。家族なんだから」

おじさんはそう言って俺の方に手を置いた。その手には今まで無かった温かみがあり、嬉しかった。

「はい」

俺は泣いていた。この日がとっても大切なものになったのを確信した。

「權莉君はここに残ってもいいのよ」

おばさんが言った。

「いや、俺は行きますよ。結月が心配だから」

「お兄ちゃんは心配性だからそれが治るまではここに居てね」

そうか、お前は俺に心配される年じゃないって証明したいんだよな。分かった。

「いいよ、俺はここに残るよ。心配な奴は他にもいるからな」

脳裏には洋の事を思った。アイツはバカだからな。

「お兄ちゃんはやっぱり心配性だよ」

「時間だし、俺は行くよ」

時計を見ると夕餉の戦いが始まる時間が近かった。

「行ってらっしゃい」

俺は「行ってくる」と言って出て行った。

俺は病院に停めていた自転車にまたがり漕ぎ出した。しばらくするとバイクに乗った連中が俺の方によってきた。

「お前にここから先には通させねえよ」

バイクに乗っていた男たちは片手に警棒を持ち殴ってきたが俺はそれでもこぎ続けた。

「何だよコイツ化け物か！ 結構、血を流してるがピクリとも動かねえよ」

「コイツ本当に人間かよ」

「でもよ、こいつはとっておきのサンドバックじゃんか」

その間も俺は頭、腹、背中を殴り続けられた。たまに鈍い音が聞けたが俺はここで止まっている場合じゃないんだよ。

「コイツで終わりだ！」

男の一人が警棒を振り下げた瞬間、俺は片足でバイクを蹴った。その瞬間、男はバランスを崩し転倒した。

「お前ら、俺の邪魔してんじゃねエよオオオオオオオオ」

俺は自転車テクの一つでジャンプして回転しタイヤを男共の顔面に叩き込んだ。

「コイツ、何でこんなに元気なんだよ」

男の一人が呟きを聞き答えた。

「俺の血を騒がしたのお前らだろオ」

「あ、悪魔だ。こいつは鮮血の悪魔だあああああ」

男の叫び声は聞こえなくなった。

「次は殺すからな」

俺は自転車を漕いだ血で真っ赤になったことは気にしないで。

「着いた」

俺は自転車から降りると周りの人間は驚いていた。今、俺の格好はどうなってるんだ。そんなことはどうでもいいそれより俺は豚との戦いが待ってるんだよ。

俺は歩く足はお惣菜・弁当コーナに自然と行っていた。

「くそつ、視界がおかしくなってきたか」

やっぱり、血を流し過ぎたか。視界がぼやけて前に進めているのが心配だ。

「あそこに居る巨体はアイツしかいないよな」

微かに見えた姿はあの醜い豚だと分かった。

「ハロー、遊びに来たぜ。パッドフット」

著我に当たりかけたカートを片手で止め挨拶をした。

「お前までその名で呼ぶか」

「来いよ、今回は手加減しないぜ」

俺は片手で掴んでいたカートを両手で掴み投げ飛ばした。

「これでお前の武器はない。ここは拳一本でやるっや」

俺は素早く殴りかかり右頬に一撃入れた。

「俺にそんなボロボロな体で勝てるのかよ」

「俺に不可能の三文字は存在しないんだよ。努力したらなんでもできるんだよ」

俺は力いっぱい床を蹴りその勢いに任せ蹴りを入れた。

「そんな物」

帝王はその攻撃を片手で防いだが後ろに数歩下がった。

「あーやつぱり、血を流し過ぎたかこれは俺一人じゃ戦えないな」

俺は後ろに居る三人に聞こえるように言った。

「なら、参加しようかな」

著我が近くに寄ってきて言った。

「お、俺も参加するよ」

洋は立ち上がり膝に手を置きながら言った。魔術師はボロボロな体で寄ってきた。

「なら、やるぞ。あの豚を倒すぞ」

俺が最初に駆け出し殴りかかったがカウンターを決められ鼻血がでた。

「大丈夫か」

魔術師は近くに來たが

「お前の方がボロボロのくせに人を心配するな」

「お前の方がボロボロだぞ」

と洋が言った。

「そんなに酷いか」

「髪が真っ赤になってるよ」

著我が言った。

「そんなに頭から血出したか」

俺は頭をかいたが感覚が無い。これは酷いな。

「さっさと終わらせようぜ」

俺はそんな事を関係が無いように言った。

「それでこそ權莉」

著我は俺の背中を叩いた。

「そんな事より早く夕餉を楽しもうぜ」

俺は立ち上がり走って勢いをつけて飛び上がり蹴りを叩き込んだがその攻撃も片手で防がれた、俺は欠かさず着地しラッシュした。

「これだけと思うなよ」

俺の方を踏み台にして著我が飛び蹴りをした。

「そこ」

俺の後ろから洋が出てきて力いっぱい殴りかかった。

「かかったな」

俺は帝王の片腕が動くが見え、それを止めるために自らそのパンチを受けた。

「洋、後はお前に任せた」

俺はそこで倒れこみ意識を失った。

「俺の部屋じゃないか」

目を覚ますと自分の部屋に居た。

「頭に包帯が巻かれてるわ」

俺は左手が動かないので右手で頭に触れると包帯が巻かれており、右手にも包帯が巻かれていた。顔にはシップなどが貼られていた。

「俺ってどんだけ、怪我したんだよ」

そろそろ、左手が動くと思っただが重くて動かない。

「どうなってるんだ。呪われてるのか」

それにしても布団が盛り上がってるような

「まさかな」

布団をどけてみると著我が俺の左手にくっついて寝ていた。また、こんなの昔はあった、洋の家に泊まった時よくあったがこの歳ですることか。

「おい、起きろ」

俺は右手で著我の頭を軽く叩いた。

「あゝおはよう」

寝起きなのかとつても軽い挨拶をされた。

「おはようじゃねえよ。なんでここに居るんだよ」

「せつかく運んだのにその態度はなに」

「お前が俺をか、よく持てたな」

「佐藤が手伝ってくれたからな」

「ああ、そうかい」

そうしていると著我は改まって聞いてきた。

「本当にイタリアに行くの？」

そんな事言つたな俺

「その事だが俺はここに残ることになった。心配な奴らがここに居るからな」

俺はため息を吐きながら答えた。

「もしかして、佐藤のこと」

「それもあるが、お前もその中に入ってるよ。てかお前が心配だ一番」

今の言葉を思い出すと俺何言ってるんだ

「い、今のは無しだ。今のは全く違う。心配なんかしてない」

俺は顔を真っ赤に否定しまくった。

「ありがとう」

「へえっ！」

俺は焦っていて聞いて聞こえなかった。

「權莉の本当の気持ちを教えて」

俺の気持ち

俺は著我の両肩を掴み答えた。

「俺はお前が好きなんだよ。この気持はお前だけにしか抱いたこと
はない」

「／／／／」

著我は真っ赤になった。

「俺はお前を守りたいんだよ」

俺は自分の気持ちを全部吐き出した。

「あ、ありがとう」

著我は照れながら返事をした。

「もう、秘密を一人で抱え込まないでよ」

「ああ、分かった」

俺はこの日、体が軽くなった気がする。

二つ名

丸富大学付属高校会議室

俺は見たくもない物を見させられている、それは洋がパンツ一枚で走り回っている物だった。

「（何やってるんだ）」

俺は目で洋を睨んだ。何で俺がここまで来ないといけないんだよ。怪我が治ってなくて痛いんだよ。

「その事です」

白梅が映像を見終わった瞬間に口を開いた。

「そちらの著我さんも学校に不法侵入されていますが」

……えーっと、俺が学校に来て無い時どれだけ変なことが起きてんだ。

話し合いの結果は両者の謝罪によって終わった。

「よろしければ学校の方を案内しますが」

向こうの生徒会長らしき人が話しかけてきたので

「どうしますか、ここはせっかく来たので案内されてみてはいかがかと」

俺は丁寧な口調で聞いた。

「そうですね」

「それなら案内させてもらいます」

ふう、副会長の仕事って両面に丁寧に接さないといけないからな

「自分は部活動の見学でもさせてもらってもよろしいですか」

俺は眼鏡をくいっとあげながら言った。

「分かりました」

白梅と離れたいからなこれは良かった。

部屋を出る際に俺と洋は著我に連れられファミリーコンピュータ部に行った。

「はあ、やっと素に戻る」

俺は眼鏡をとった。

「凄いな、そのギャップ」

洋は俺の姿を見ていった。

「はア、何言ッてんですか俺はこれが素なんだよ」

「なんでキレ気味なんだよ」

「あアん、変態に言われたくないな」

「僕のどこが変態なんだよ」

「女子の服でいたとこ」

真っ直ぐな髪を乱して全部後ろに上げた。

「それは、いろいろ訳があっただよ」

「変態に意味なんかないと思うけど」

「だから」

言いかけたとこで著我が邪魔した。

「ほら、喧嘩しない」

「ちっ、勘弁してやるよ」

「なんで、著我が言葉を聞くんだよ」

「別にいいだろ」

「それより、そろそろ夕餉の時間だし行かない」

「りよ かい」

「その怪我で戦えるのか」

洋は俺の怪我を見ながら言った。

「こんなもん怪我に入らねえよ」

「さすが」

と言って著我が俺の背を叩くが正直に痛い。

「それよりいこうぜ」

俺が言っつてそのままスーパーに向かった。

「それにしても、今日は多くないか」

「そっだな」

今日は見る限り多い。

「関係ないがな」

俺はニヤリと笑いながら今回の戦いを楽しみ待っていたら男が一人近づいてきた。

「お前が噂の佐藤か」

「え、そうだけど」

男が洋に話しかけていた。

「僕ってそんなに有名なのか」

「噂で聞いたがお前の二つ名が出来ている、そこの横に居る奴もそうだが」

俺も、俺はもう二つ名なんだがな。

「教えて、僕の二つ名を教えて」

洋は喜びながら聞いた。

「《変態》だ」

「へ」

洋の顔は啞然としていた。

「横に居る奴は《鮮血の悪魔》だ」

それってバイクの男が最後に呟いた名前だよな、興味ないな。

「だれだ」僕の名を変態にした奴は」

洋は絶望に満ち溢れた声を出していた。

「五月蠅いな」

俺は洋の隣から離れ著我に近づいた。

「知ってたのか」

「知ってたよ」

平然と答えられたのはムカつく。

「俺の名が変わったんだが知らねえか」

「権莉のは私は知ら無いけど、あの戦いを見ても悪魔には見えなかつたけどな」

「それは普通にありがたいが俺の名ってどうなるんだろうな」

「たぶん後者の方で知られるんじゃないの」

「マジかよ。ダサくないか」

「前の語呂が悪いし今のが良いんじゃないの」

「はあ、しょうがない。二階堂見つけたらしばくか
そう言ってるると二階堂が現れた。」

「それについては謝る。それは俺の部下がやった事なんだ」

「そうか、なら一発殴らせろ」

「それは勘弁してくれ」

「勘弁して欲しかったら、洋の二つ名を広げろ」

「それなら良いだろ」

二階堂は親指を立てて答えた。

「よろしく頼むよ」

その日は雑談をして弁当を取って終わった。

セガサターン！

次の日学校の生徒会室で書類の片付けをしていると洋から連絡が来た。

「この電話は只今使われていません。御用のある方は人生をもう一回やり直してからご連絡してください」

「白梅に丸富付属から二人来るって言つていて」
俺のボケはスルーですか。

「分かった。俺も仕事終わらせたらそつちに行くよ」
「先輩に言っておくよ」

電話を切り書類から手を離し白梅に話しかけた。

「白梅さん、丸富から二人こちらに来るみたいです。と言ってもH^{ハイフ}
P^{ライサー}同好会に来るみたいです」
「分かりました」

白梅はそう言いながら高速に手を動かしながら書類をまとめていた。

「それにしても多くないか」

俺の前には書類の山が二つ目の前にそびえている。

「早く終わらせるか」

また、書類に手を書き始めた。

「先輩、權莉も来るそうそうです」

「奴も来るのか」

先輩はイスに座りなが言った。その時、扉が開いた。

「来たぞ」

「連絡して一分しかたつてないぞ」

「俺の仕事率を嘗めるなよ。一般的な人間はニュータイプには勝てないんだよ」

「何でガンダムなんだ」

「ロボットの代名詞だから」

權莉は笑いながら言っていた。

「そうだ、コレを渡すよ」

權莉はポケットから一枚の紙を先輩に手渡していた。

「これは本当か」

先輩は喜んでいて。何をしたんだ權莉

「これからよろしくな。洋」

何がよろしく何だ？

「分からののかよ。俺もこの部に入ったんだよ」

「本当か！」

「ああ、そうだがテイション高くないか」

「だって、男がこの部に入るのがこんなに嬉しいのが当たり前じゃないか」

「何で嬉しいんだ」

權莉は困った顔をしていた。

「だって、幼馴染みなんだぞ」

「それが？」

「嬉しくないのか！」

「あんまり」

「權莉は嬉しくないのか」

「お前はこれが趣味だったのか」

そう言っつて權莉は手の甲を頬の横に添えた。

「断じて違う！」

ここでそれは爆弾だ、後ろで白粉おしろいが喜んでるじゃないか止めてくれこれ以上、白粉おしろいのネタを増やさないでくれ、そしてお前の小説入りは確定したぞ。

「初めての眼鏡キヤラ来た

もう喜んでるよ。權莉、一緒に地獄に落ちようぜ。」

「何か知らんが断る！俺はこの眼鏡は伊達だからな。そして、受けじゃない攻めだ」

それこそお終いだ

「さすがです、これは書きごたえがあります」

白粉は權莉に近づいていた。

「妹がファンなんだ、面白い物を期待してるよ」

「今なんて言ったんだ、僕には聞こえなかった。」

「知ってるんですか」

「妹が病室で暇だったからパソコンを持っていったら自分でそのサイトに行って読んでいたよ」

「これは嬉しいですね」

白粉興奮していた。

「良かったら洋のあんな過去やこんな過去を教えてあげるよ」

權莉はそう言って何枚かの写真を白粉に見せていた。

「凄いです。このアングルなんかとつてもいい」

「素晴らしい作品の為なら情報提供は惜しまないよ」

「感謝します」

何だか僕の目の前で熱い握手をしていた。

「それにしてもお前が群れることを選ぶか」

「この部に入っていたらあなたの弱点を探れるからな」

「それは嘘だな」

「いやあー俺って嘘が下手なんですよ」

そろそろ僕を会話に入れてください。

「部活と生徒会のかけもちは大丈夫なのか」

「心配してくれるのはありがたいですけど俺はバイトのかけもちを

してましたからこれぐらいはできますよ。勉強もそうですけど」

權莉は笑っていた。

「なっ、お前は知っているのか」

「どーでしょうねー」

なんかこの二人仲がいいんですけど、早く誰がこの空気をどっにかして。

その願いが届いたのか部室の部屋が開いた。

「きたよ。佐藤」

著我とあせびちゃんがやって来た。

「よう、あやめ」

權莉は後ろを向い挨拶をした。今、あやめ（・・・）って言わなかったか、いつもの權莉なら著我って言うのに。

「どうしたんだ、權莉身も心も生まれ変わったのか」

權莉は何の事だみたいない顔になりやがった。

「どうしたんだ、いきなり。気持ち悪い」

「だって、權莉が著我って言わなかったから」

「それぐらいで驚くなよ。人間いつかは呼び名も変わるんだよ」

「へえー權莉ってそう思っていたんだ」

著我がジト目で權莉を見ていた。

「いや、こ、これは言葉のあやであって、すいませんでした」

權莉は綺麗なジャンピング土下座をした。

「よろしい」

著我は笑いながら許していたけどこれは何？

「僕の知らない間にこの二人に何があったんだ」

「それはまた話すよ」

權莉はそう言って著我と話始めた。二人の距離近くないか。

「……權莉、お前は僕を裏切ったな」

「ちっ、気づきやがったか」

舌打ちしながら僕から遠ざかろうとしていた。

「どうしたんだ二人とも」

先輩は意味が分からないのかどう対処したらいいのか困っていた。

「權莉は僕との約束を忘れたのか」

「お前との約束なんか守るなんて嫌だね」

「何だと！」

僕と權莉はデコをくつつけながら言いあっていた。

「大体、お前に彼女何んかできるか」

「そう思っていられるのは今のうちだ。夏休みなれば時間なんかい

っぱいあるんだその間に見つけてやる」

「言ったな、もし見つからなかったらなんか奢れよ」

「良いだろう。その代り見つかったら權莉も奢れよ」

「牛乳瓶一本奢ってやるよ」

「それは奢るのカテゴリに入っていない」

「なら、今からここで勝負するか」

「良いだろう」

「なら、セガサターン持って来いよ」

權莉は俺の肩を叩いて笑った。その後ろでは先輩に負け続けていた著我の姿が

「佐藤まじで、セガサターン持ってきてくれるのか」

著我は僕たちの話にくいついた

「嫌だ」

「なら、お前の二つ名ばらすぞ」

「本当か佐藤お前にも二つ名が出来たのか」

先輩は喜んでいたがここで言われたらアウトだ。

「行ってきまーす」

僕は走って取りに行った。

その結果、負け続けていた著我は先輩に無双していた。

「やっぱり強いな」

權莉は僕の横で呟いた。

「まあ、それもそうだよな。親父といい勝負するからな」

「勝てるか、洋」

「僕じゃ無理だ。權莉こそどうだ」

「言うまでもない」

バトルが終わり先輩は僕に質問をしてきた。

「佐藤これはどれくらいするんだ」

先輩もやるのかなと思って答えた。

「四千円ぐらいです」

「そうか」

　　といって先輩はコードを抜いて窓を開けて僕の制服を投げたようにセガサターンを投げた。

「セガサターン！」

　　僕は窓から飛び降りた。

「ここは五階だぞ！　アイツはバカか。急げば間に合っとな」
　　權莉の呟きは聞こえなかった。

お前も来たのか(前書き)

目が！ 目があああああああ！
す。 的な状態に陥っている作者で
続きをどうぞ

お前も来たのか

洋の奴が部室からダイブしやがった。

「なにやっつてるんだ、あのバカ」

俺は急いで部室を出て死体処理に向こうとしたが、

「何で、こんなとこにバナナの皮があるんだよ」

俺は急いで階段を降りて四階に降りようとしたら丁度U字ターンのとこにバナナの皮があつて、滑って前に落ちていき不幸なことに窓が開いていた。

「俺、死んだよ」

俺はふと考えた、下は確か花壇の土しかなかったよな。安心した俺だったが次の瞬間聞きたくない言葉が聞こえた。

「この砂利をここに撒いたし行くぞ」

嘘だろ、今日はそんながなかった……あつたー

「後悔しかないよ」

俺はこのまま死んでどこに行くんだろうな、父さん、母さんのとこに行けるのかな。それでも後悔しかないよ。

「知らない天井だ」

ここが天国なのか、天国は病院なんだな。隣のベットには洋がいるよ。

「起きろ。洋」

俺はベットから出て、洋の頭を叩いた。

「いて、なんだ權莉か。ここはどこだ」

「天国だ」

俺は普通に答えた。多分、天国だろう。

「僕、死んだの！ 何で權莉が居るんだ」

「俺はその後、階段から落ちて窓からダイブしたんだよ」

「ドジだな」

洋が笑いながら言った。

「お前なんかSSセガサターンの為に落ちるなんてな。プツ」
俺は笑った。

「貴様、笑ったな！ 良いだろうここでもお前と戦うじゃないか」
洋は立ち上がり俺に近寄った。

「いいだろう。受けて立つ」

俺は洋のデコに頭突きを入れながら言った。

「僕の本気を見せてやる」

お互いに殴りかかろうとしたとき扉が開いた。

「おい、大丈夫か」

俺たちはお互いに殴るのを止めてあやめの方を向いた。

「あやめ（著我）も来たのか」

俺たちは同じことを言った。

「はあー何言ってるの」

あやめは呆れながら言った。

「自分が死んだと思ったの？」

俺と洋は頷いた。それはそうだ俺は四階から洋は五階から落ちたんだぞ。

「死んでいないよ」

その言葉は俺にとつてはとても嬉しくあやめに抱き着いた。

「やったー！ 俺、生きてる！」

嬉しいな、こんな嬉しいのは久しぶりだよ。

「いつまで抱き着いてるのノノノノ」

おっと、俺としたことが嬉しすぎて忘れてたよ。

「すまん、生きてる事が素晴らしすぎてつい」

「ついで抱き着くんだ」

「違う、本当に嬉しすぎて」

「本当に」

あやめがジト目で見てくる。

「ほ、本当に決まってるだろ」

「それなら良かった」

俺は正直怖かった。違うことを言ったら死んでたな。

「それより、俺達よく無事だったな」

「そうだよ」

「いや、佐藤は木にぶつかってセーフなんだけど、權莉は普通に地面に落ちたよ」

「……… なんと言いましたか？」

「俺は砂利に頭をぶつけたのか」

「良かったな、これでお前もバカの仲間だ」

洋が肩を叩いた瞬間に殴って撃沈した。

「それが砂利の撒き忘れで助かったんだよ」

「それなら良かったよ」

「それで、入院費はタダだって」

「それはおかしいだろ」

普通は取るだろ赤字になるぞ。

「ここはあせびのところで事情を知ってるからな」

「もしかして、あの子なんかついてるの？」

いきなり怖くなってきたな、あんな笑顔に裏があるなんて。

「コレを見て」

あやめがポケットから取り出したのは焦げた何かだった。

「何だそれ」

俺は指で指しながら聞いた。

「これはお守りよ」

「それで」

「だから、あせびの近くに居たらこうなったのよ」

「なんだってー！」

「嘘だろ、やっぱり何かついてんじゃ！ 早くお祓いに行かなくてはならない」

俺は急いで携帯でお祓いをやっている神社をググった。しかし「何で近くはないんだよ。近くても県外かよ！」

なんで近くて隣の県なんだよ。

「權莉これが現実よ」

俺は何だか現実リアルが嫌いになりそうだ。

「俺、何だか死んでも良かったと思ってきたよ」

俺は窓から空を見上げた、なんで夕方なんだよ。

オルトロス

入院費が無料だったがそれでは納得がいかなく俺は少ないが出して帰りに弁当を買って帰る為にスーパーに向かった。

「ここでもやってるのか」

俺は病院の近くの地理を全く知らないからここでやっているのか心配になった。

「これなら、ジジ様のところに直行すればよかつたか？」

時間もギリギリだな、今向かっても無理だし今日はここにしようか。俺は入って行ったら、一度見た事があつた姉妹がいた。

「確か、あれは丸富の生徒会の二人じゃないのか？ それにあそこに居るのは二階堂か」

俺は二人の姿と二階堂の姿を見つけた。

「なんだ、アイツ等も狼だったのか。人は見かけによらずってこういうことなんだな」

俺は感心しつつここで争奪戦が行われることを知った。

「なんだ、お前も来たのか」

ふと、顔を上げると二階堂が側に寄って来ていた。

「今日は病院の帰りだったんだ」

「まだ、傷が痛むのか」

二階堂は俺を見ながら怪我を気遣ってくれた。

「学校の窓から落ちたんだよ」

「以外にドジなんだな」

「違う、走っていたら足元にバナナの皮が落ちていたんだ」

「言い訳だな」

「校則では廊下での飲食は禁止されているんだ。もし、落としたり奴が見つかったら血祭り決定だがな」

俺はにやけながら言った。

「お前は敵に回さない方が安全だな」

「心配するな、俺はお前には危害を加えることはない。お前は改心したんだからそれでいい」

「ふん、お前は嫌われているが俺はお前の事を気に入ったよ」

「あー、俺って他の連中に嫌われてたんだ。まあ、それはそうだしいいや。」

「それより、そろそろ始まるぜ。俺は味噌カツ弁当だな」

それだけを言っただけ俺は弁当コーナーに走っていった。

「出遅れたか」

二階堂は悔しそうに走り出した。

「そこ」

俺が一番近い相手を殴れ飛ばして少しだけ近づいたら姉妹のアイツ等が来た。

「あなたも狼でしたのね」

「まあな」

俺は笑顔で答えて拳を作り殴りかかった。

「女性でも手加減は無いのですね」

「一人の狼なら手加減したら失礼だろ」

前の俺はそんなことは関係なかったからな。

「あなたとなら良いバトルできますわ」

「姉さん落ち着いて」

気づくと俺の後ろに妹がいた。

「後ろをとられたか」

この姉妹はカゴを使うのは上手いな。

「ヤバい、考え過ぎた」

はっと気づいた俺は素早く体をしゃがませカゴの攻撃を避けたと思っただけ、上からカゴが頭に当たった。

「あいては二人だった。不覚だ」

俺は立ち上がり弁当の棚の近くまで寄り弁当棚を掴み立ち上がった。

「今日は最高に気分が良いよ。最高の相手が見つかったよ。ありがた。」

とっ」

俺はこの日一番の笑みで姉妹を見た。

「最高ですか(・・)」

「ああ、最高だぜエ。今日は楽しいよ」

「そうですね、それならこちらも手加減無しで行きます」

その後、そこでは凄いバトルが行われた。

「はあ、何とか弁当は取れたか」

俺は味噌カツ弁当を手に入れることが出来たがオルトロスも弁当を手に入れていた。

「あの、よろしいですか」

姉の方が俺に話しかけてきた。

「どうしたんだ」

「良ければアドレスを交換しません。今後も楽しい争奪戦をするため」

「別にいいぜ」

俺は携帯を取り出しアドレスを交換した。

「妹の方も交換するか？」

俺は妹の方にも声をかけた。

「なら、交換します」

交換して俺は自分の寮に帰ろうとしたがどこに居るのか知らない為、二階堂に道を聞いて寮に帰った。

勉強

バイトをしなくなって朝に余裕ができ素晴らしい土曜の朝が来た。その幸せは一つのコールによって崩壊した。

「携帯がうるさいな」

俺は携帯の着うたによって起こされた。

「誰ですか？」

俺は眠気に負けないと声を出した。

『あつ、權莉おはよう』

声はあやめの声だった。

「おはよう。で、どうしたんだ朝から」

『勉強教えて』

この声によって久々のオフは消えた。

「来たぞ」

俺はインターフォンを押して答えた。

『開いてるから、入って』

俺は物騒だなと思いつながら部屋に入った。

「で、いきなり勉強なんだ」

あやめは頭を掻きながら答えた。

「いや」テスト一週間前で勉強ができるのが權莉しかいなくて」

「俺はお前のことと学校は違うんだが」

「大丈夫だって、權莉の頭は凄いんだから」

「あれはタダの奇跡だ。それに俺は頭はよくな」

本当だぜ、授業中は寝てるし（バイトがあつた時は）ノートは一応は取っているが読み直すのがダルイから置き勉強してるんだぜ。

「そのくせに全国模試で一位を採るんだ」

努力はしてないんだぜ、適当に答案に答えを記入したら全問正解して、表彰されただけなんだ。

「あれはだな、鉛筆を転がしたただけなんだ」

「記号問題なんかなかったよ」

「そうだったかな」

俺の顔は多分、(・・・)の様になっているに違いない。

「なんで、黙ってるの?」

「……………」

だんだんと近づいてくるあやめの顔になんだか覇気を感じるのは気のせいだよな。

「わ、わかった。お、教えてやるよ」

「よし、始めよう」

上機嫌になりやがった。俺もそろそろ試験に近いんだぞ。

「それで、何からやるんだ」

「これ」

出したのは数学?だった。これぐらいだったら教えることはないな、そう確信してた。

「本当に俺って必要ないんじゃないのか」

「そうかな」

そう言っているあやめだが、分からなかったら一瞬でシャーペン置くのになんで三時間も書き続けてるんだ。

「ここ、教えて」

やっと出番だ。

「ここはだな三角比の定義を使ってだな……………それにしても進の早くないか、俺はまだここやってないぞ」

「それでも、分かるんだ」

あっ、墓穴ほった。

「教科書になってるんだよ答えはな」

「いや、教科書見てないし」

「予習してました」

俺は素直に言っと教科書を貰うと一回全部の問題や文章をノートに写して予習をしていたんだ。すると、授業を聞かなくても答えが

分かるんだよ。

「仕方がない、今日はあやめが分かるまで付きやっつてやる」

夕方まで勉強してたらメールがやって来た。誰からだ、ディスプレイを見たら沢桔姉からのメールだった。

『今日はここに参ります』

と地図を添付していた。

「どうしたの、權莉」

あやめが覗いてきた。

「勝手に覗くな。争奪戦の誘いだよ」

「行くの？」

「あー今日は止めとくよ、お前との約束があるし断っておくよ」

『>すまない』

>今日は用事があつて行けない。

>次、行くときは言ってくれ、その時は楽しい争奪戦をしようぜ』

これでいいかな、送信。するとすぐに戻ってきた。

『>分かりました。』

>次を楽しみにしています』

妹の方からメールが返ってきた。

「これで、集中して教えられるよ」

その後はゆつくりと丁寧に教えた。

風邪

あやめのテスト勉強を一週間見終わって、交代で俺の学校はテスト一週間前に入った瞬間に連絡が入った。

『風邪引いたみたい』

「分かったから、安静にしてろ」

俺は寮を出てバスに乗ってお見舞いに行った。

「大丈夫か」

俺はドアを開けながら言ったら服が乱れているあやめが出てきた。

「お、お前なんて恰好してんだよ／＼／＼」

「どうしたの照れて」

お前は自分の恰好を分からないのか。

「それで、出歩いていいのかよ」

俺は目を逸らしながら話しかけた。

「まあ、少し辛いかな」

「それなら、何か作ってやるから寝とけ」

俺はあやめを部屋に戻し、台所を借りお粥を作った。

「もう少し、塩がいるかな」

俺は味見をしてから持っていった。

「出来たぞ」

「ありがとう」

机の上に鍋を置いて、お茶碗に少しだけよそった。

「ほら、熱いから気をつけろよ」

「温かい」

あやめは茶碗を持って呟いた。

「いきなり風邪をひくか」

俺は呆れながら言った。

「何だかさ、テスト終わったら体がだるくてさ」

「まあ、なんだ。辛くなさそうで良かったよ」

「それにしても塩分強くない？」

「おい、そこは強くても感謝しろよ。その味は俺の家の味なんだよ、証拠に少しだけ和風だしの味がするだろ」

「本当だ、少しだけするよ」

「少しだけかよ」

俺は少しがっかりした。

「嘘だよ、美味しいよ」

あやめは笑顔で言った。その笑顔は反則だ。

「／／／／／」

あやめは何にか思いついた表情になった。

「もしかして、料理を褒められたのは初めてかな？」

「っ！ そうだよ、悪いか！」

「悪くない。その、嬉しかった」

気が付くとお鍋の中のお粥は無くなっていた。

「ほら、薬飲めよ。買ってきたから」

俺はビニール袋から風邪薬を取り出した。

「本当にありがとう」

「そんな感謝する事じゃねえよ。これは俺がしたくてやってる事だからな」

「權莉つて、ツンデレ？」

「ふざけるな、誰がツンデレだよ。それと調子乗るなよ」

「いいじゃん、病気の時ぐらい我が儘言っただて」

「俺はな、病気になるると凄く心配になるんだよ。どんなに軽くても死んだりするんだからそんなに調子乗るなよ。だがな、今日だけはお前の我が儘聞いてやるよ」

俺は顔を真っ赤にしなから言った。

「あ、ありがとう」

あやめも同じく照れた。

「先にお鍋とか洗っておくから、汗かいたなら着替えとけよ」

俺は台所に向かい洗い物を済、戻ったら啞然としてしまった。

「／／／／／」

声が出ない、戻ったら丁度着替え始めたあやめと目が合ったからだ。

「す、すまん。」

俺は急いで後ろを向いた。

どうなってるんだ、普通は着替え終わってるのが普通だ。この頃、俺の身近で起きることは何だかゲームのイベントみたいだ。

「き、着替え終わったか／／／／」

俺は後ろを向いた状態で聞いた。

「う、うん。着替え終わったよ／／／／」

前を向きなおしたら真っ赤になったあやめがそこに座っていた。

「見て、ごめん」

俺は素直に謝った。

「別にいいよ。タイミングが悪かったのもあるしさ」

「いや、見た俺が悪いんだ」

「私だから」

「それだけは譲れない」

その後も自分が悪いなどと言いつつ合った。

「さて、俺は今日は帰るよ。汗かいたらすぐに拭けよ」

「分かってるよ」

「じゃ、テストが終わったらまた来るから」

「あつ、そうだった。貴重な時間取ってごめん」

「それぐらいで謝るな、俺は勉強しないから安心するな」

「それなら安心した」

「それじゃあな」

俺はあやめに近づき不意にキスをした。

「元気だな」

「／／／／／」

あやめは真っ赤になっていた。

土用の丑の日

テストが終わり（結果は白梅と同じ一位でしたが）この日が来た。弁当の争奪戦が俺の日常に帰ってくるのにいい日だ。

「あの二人には感謝だな」

争奪戦を休んでる間に沢桔姉妹とのメールで美味しい国産ウナギ弁当を売っている店を教えてもらった。これはとってもいい情報だった、何よりメールなど誰ともしないので楽しかった。

「さて、行こうかな」

俺はスーパーに向かって行った。俺が現れたら全員は嫌な顔をすと思うけどな、そんな事を思いながらランニング程度に走って行った。

「よう。情報ありがとうな」

俺はスーパーに着いた時には沢桔姉妹が居たので話しかけた。

「あなたは私たちに話しかけてくれるんですね」

「はあ、何言っただお前。俺はお前たちがここの情報を教えてくれたから来たんだよ。ありがとうな」

なんでこいつはこんなに暗い顔してるんだよ。

「感謝などされることはしてません」

「どうしたんだ、何かあったんなら相談乗るぜ」

俺は事情がどうあれそんな暗い顔をされたらこっちの調子が狂うよ。

「いえ、ありませんわ」

「あるな！ 言ってみろ。俺はお前たちの友達だ。だから、お前が嫌でも俺は聞く、そんな暗い顔をされたら心配するんだよ。言っスツキリしろ」

俺は姉の方から話を聞いてキレた。なんだよそいつ、あつたら殺してやるるかwww

「そんな変なことかよ。俺なんか他の狼に嫌われてるぜ。ほら、そこ見てみるよ」

俺が指を指したところに居たのは俺を見てずっと睨んでいる男だ。「俺ってさ、性格悪いからさ人に嫌われやすいんだよ。だから、お前たちが友達になつてくれて嬉しかったぜ」

「ありがとうございます」

妹の方が感謝してきたが、姉はビククリしていた。

「おいおい、感謝するのは俺の方だからさ、これからの仲良くしてくれよ」

俺は二人に手を差し伸べた。二人は俺の手を握ってくれた。

「あれ、權莉来てたんだ」

良い空気を台無しにしたのは洋だった。

「何良い空気を潰してんだよ《変態》」

「僕をその名で呼ぶな！ 權莉この戦いで僕は勝つて見せる」

「良い度胸だな、俺に勝てるってほざいたのはこれで何回目だ」

「何言ってる、これが初めてだ」

「おいおい、何言ってるんだよ。中学の時に何回も言ってたじゃんかよお」

「くそお、權莉お前ってやつは何所まで僕を嫌ってるんだ」

「お前が俺を嫌ってるの間違いじゃないのか」

俺たちはデコをぶつけて言い合いになっていた。

「もついい、そろそろ始めるから俺は行く」

俺は面倒になりその場から離れて待機した。そして、時が来た。

「始まったか」

今日はいつもに増して狼が多いそして、嫌な空気が張りつめていた。

「ここに来てるんだよな、アイツはよお」

俺は沢桔の話に聞いた奴がどんな奴か知らないがここに来ているのは聞いたからそいつを見つけてぶん殴って美味しい飯を食うことに決めた。

「どこに居るんだよオ、ヘラクレスの棍棒さんよオ！」

俺は周りの奴を殴りながら暴れまくった。テストで溜まったストレス、テストのせいで溜まった書類の山の格闘のストレスをこの争奪戦で発散して行った。

「どこに居るんだよオ！俺はお前をぶん殴らねエとさア、いらいらすんだよオ！」

俺は目の前にいきなり現れた男を何だか勘で、こいつだと思いの一杯ぶん殴った。

「あつはーやっぱ楽しいなア、この時間は楽しすぎるぜエ」
さて、楽しんだところでお弁当を探りに行こうか。

「コイツはア、俺の物だア！」

棚の前に居た男を殴り飛ばし弁当を獲得した。

「さて、他のはどうなった」

周りを見ると床に倒れこんでいるのがほとんどだった。

「誰がやったんだ。これは酷いな」

俺は呟いた。

「ほとんどやったの權莉だ」

後ろから洋の声がした。

「弁当採れたか、良かったな」

「良かったよ。じゃない、權莉暴れすぎだ」

「コレも一つの戦争だ、俺は手加減なんかしてられないんだよ。アイツに勝負したいからな」

俺は《魔術師》と戦いたかったのにいなかったことにショックを受けてんだよ。

「はあ、なんで来てないんだよ。でも楽しかったからいいか」

レジで精算を終わらせ帰ろうとしたら、沢桔姉妹がやって来た。

「次はあなたと戦いたいですわ」

「そういえば、戦ってないな。その代り手加減はしねえから」

「望むところ」

「じゃ、俺は寮に帰って夕餉を楽しむよ」

と言ったら姉の方が何か言いたそうだった。

「どうしたんだ？」

「よ、よろしければ一緒に食べませんか？」

「そうだな、一人で食っても美味くないしな」

と言ったら、洋がいつも言っている。坊主、あこひげ顎鬚、茶髪がやって来た。

「なら、一緒にお前も食いに行こうぜ」

顎鬚が言った。

「たまには大勢で食うのも悪くないな」

坊主が言った。

「ほら、行くよ」

茶髪が言った。

「はは、これは面白いメンバーだな」

近くの公園で五人で食べたが、顎鬚と坊主はなかなか面白い奴だと思った。

夏休み（前書き）

そろそろ、テスト期間に入るので投稿が出来なくなります。と言ってもあと数日は書く事が出来ますので。

夏休み

早速だが、俺は今飛行機の中にいる。いきなりすぎてすまないこれは昨日の事だった。

「結月から手紙が来てる」

寮の方に手紙が来ていたので開けると一枚の写真が入っていた。

「こ、これは」

俺は写真を見て固まってしまった。

「嘘だろ……だれか、嘘だと言ってくれ」

そう、写真にはイタリアの少年とのツーショット写真だった。

「い、妹に変な虫が……どうしたらいいんだ」

考える、冷静になれ、相手はまだ小学生だ。ただの友達に決まっている。そうに違いない、俺はすぐに間違える。そうと決まればイタリアに行くか。

「手紙の中になんか入ってるな」

入っていたのは行きと帰りの航空券だった。

「ファーストクラスだと！ しかも、帰りはビジネス。俺の新しい親は子供にどんな体験をさせたいんだ」

手紙には『結月ちゃんに虫が付きそうなんだ！ 何とかしてくれ

by父』と書いていた。

「よし、よく見たら今日の夜の便だ」

俺は心の中でお義父さんに感謝した。

そして、今に至る。

早く着かないのか、この間にも結月に変な虫がつくかもしれないんだぞ！ イライラ、イライラ、してきた。そういえば強化合宿があったよな気がするがこの際はスルーだ。妹の方が大事なんだ、争奪戦の為の強化合宿なんて二の次だ。俺の心におっ立つ三本柱は、友情・努力・勝利じゃない。妹・妹・妹だ！ 違う、これじゃどこ

かの変態みたいじゃないか。俺は断じて違う。俺は、シスコンだ！
これじゃ、どこのガンダムマイスターだよ。

「はあ、心配するのでもいいけど睡眠をとらないとな。最近仕事が多
くて睡眠時間が無かったからな」

俺は携帯を開けてメールを見ると一件だけ受け取っていた。

「沢桔姉からか」

メールを見ると、お土産よろしくと書いてあった。どうして旅行
してるのか知ってるんだ。一応買っていくからいいけど、そんな事
より寝よう。

番外編的な物 1 (前書き)

Angel Beatsに主人公を混ぜてみました。

「俺って死んだんだ」
「へえ、驚かないんだ」
「あるがままに受け入れた方が容量を使わなくて済むからな」
「あたは頭脳派なのね」
「そんな事より、あそこで死んでるやつはどうなるんだ」
「俺が指を指して聞いてみた。」
「この世界では死なないからそのうち生き返るわよ」
「ふうーん、それはそうとして。俺とお前らの制服は何で違っただ」
「最初から気になっていたが聞きたい事が多くて聞くことを忘れていた。」
「それなら、入隊してくれない？」
「入隊？ 軍隊か、何かか？」
「そんなところね」
「行くあてもないから入るよ」
「ようこそ。死んでたまるか戦線へ」
「ゆりは手を伸ばしてきたので俺は手を取り握手した。」
「そうと決まればついて来て」
「ゆりの誘導についていく俺に青髪の男が話しかけてきた。」
「俺は日向よろしく」
「よろしくな」
「緋音は記憶がないんだよな」
「そうだけど」
「そうか、記憶が戻るといいな」
「その時は名前で呼んでくれよ」
「いいぜ」
「なんだか、こいつとは仲良くできると思った。」
「ちよつとここで止まって」
「校長室の目の前で止まった。」
「なんで、止まるんだ」
「合言葉を言わないと怖い畏があるんだぜ」

ゆりの代わりに日向が説明してくれた。

「そうだったのか」

「なし」

カチャと扉の罫が外れる音がした。

「ところで、どんな罫だったんだ」

「それは見てからのお楽しみだぜ」

「面白いわよ」

俺の予想では面白くない、絶対に

「ここが死んでたまるか戦線よ」

その中には数人の居た。

「これだけなのか？」

「他にたくさんいるけどここに来るのはこれだけよ」

「ゆりっぺ、そいつが新人か？」

ドスを持った男がゆりに話しかけていた。

「出会ったうちの一人よ」

「と言うことはもう一人いるのか」

あーグラウンドで死んでたのもメンバーだったのか。

「今頃、回収班が保健室に運んでると思うわ」

「浅はかなり」

今度は隅の方から声がした振り返ると首に長い襟巻をした女がいた。

「ゆり、そろそろ。紹介してくれないか」

「そうね。そこで眼鏡を掛けているのは高松君ね、知的キャラに見えるけど本当はバカよ。こっちの特徴が無いのが大山君ね。」

特徴が無いと言うのは失礼じゃないか。

「で、彼は藤巻君ね」

「よお坊主」

「ああん！ 喧嘩売ってんのか？」

何か知らんが気づいたらそう答えていた。

「次は彼ね、彼は松下君。柔道五段だから皆は敬意持って松下五段

って読んでるわ」

次の人物に行くときにバンドナの男が現れた。

「Hey! easy do dance!」

「暇なときにまた誘ってくれよ」

「隅に居るのが椎名さん。こっちが岩沢さん、彼女はバンドを組んでるのよ」

「よろしくな」

「これが制服ね」

「ここでようやく制服が渡された。」

「どうも」

俺は制服を渡されたので着ようと思っただけで服を脱ぎだした。

「ここで着替えるの?」

「ゆりが訪ねてきた。」

「いや、だつてさ。ここ以外に着替える場所知らないしさ」

「と言いながら俺は学ランを脱ぎ捨てた。」

「まさかのカッターシャツまで綺麗にボタンが閉められてるんだな」

「ちよつと待つて」

「どうしたんだ?」

俺はブレザーを着終わってズボンに手をかけていた。

「目を逸らすから、ちよつと待つて」

「そうだな、男の下着なんか見たくないもんな。忘れてたよ」

ズボンを穿き終わった。

「それにしてもブレザーの方が落ち着くよ」

「そうになると、前世はブレザーだったんだな」

「そうだな、多分」

その後、俺は日向に寮がある事を聞き一緒に戻った。

番外編的な物 1 (後書き)

息抜きに書いていきます

イタリア

着いたぞ、イタリア！ 私はここに来たのだ！

「さて、ふざけてないで。家に向かうか」

紙に書かれてある住所を探すことから始まった。なぜ、連絡を入れないのか。それは、両親の二人は団の練習、妹は図書館らしいです。

「寂しくないよ。寂しくはないんだ」

ただ、切ないんだ。一人でいるのが

外人と話すときは『』で話をするのでご了承を

そんな事より家の方に向かうか、イタリア語は機内の中で覚えたんだ……だがな、住所が分からないんだ、始めてくるんだ分からないのが当たり前なんだ。

『姉ちゃん、俺らとお茶しない』

おいおい、道端でナンパって、日本とまるきり同じじゃないか。

よく見るとあの女見たことがあるな、てか知ってるよな俺……って！ 著我じゃねエか！ そういや、あいつ帰省してたんだよな。しようがない。

『おい、くそ餓鬼共何やツてるんですかア！』

俺は近づき男たちに話しかけた。

『何だよコイツ、俺達に文句があるのか』

『ちよつと、こつち来いよ』

俺は三人の男たちに連れられ建物の影について行って、三分後

『三下共がア、喧嘩売る相手を間違えたなア』

俺は無傷で出てきて少しばかりお金が入った。

「よオ」

俺は出てきてあやめに話しかけた。

「びつくりしたーいきなり權莉が現れたから驚いたじゃん」

「それにしてもここで会うなんてな」

「てか、なんでここにいるの？」

俺は真剣な顔になって話すことに決めた。

「それがな、妹に豚野郎が近づいてるみたいでな、心配で来た」

「そういえば、權莉はシスコンだった」

「それを本人の前で言うことか」

「いいじゃん、それより一人なら付き合え」

「その前に俺は自分の家に行きたいんだよ」

「連れてってやるからさ、付き合え」

「分かったよ」

ああ、なんでこうなるのかな。

「それで、なんで男物の服やなんだよ」

「いや、權莉の服いつも一緒じゃん」

「同じのが何枚もあるだけだよ」

「それより、たまには違う服でもきなよ」

「分かったよ。俺、選ぶの嫌いだから聞いてくる」

俺は服を選ぶのが嫌いなため適当に買うが今日は店員に聞いてみることにした。

「すみません」

男性の店員に話しかけた

「何でしょうか、お客様」

「服を探してるんですがおススメの服ってありませんか」

男性はその言葉を聞いた瞬間に閃いたのか店の中を走って服を取って来てくれた。

「お客様にはこちらの服がよろしいかと」

見せられたのは某魔術小説のアクセラさんの服を渡された。

「これ以外にありません！」「そうですか」

否定できないのか、買うしかないのか、買ったならそこで俺は何かを失う感じがしたが店員が持ってきたものだし買っておくことにした。

「買ってきたぞ」

服を着替えて出てきたらあやめは笑い出した。

「何だよ、權莉その服ただのコスプレになってるぞ」

「目の色は違うからセーフだ」

「何言ってるんの、權莉の目は赤色じゃん」

「そうだったか」

「もしかして、見たことないのか」

俺は顔を立てに振ると、あやめは鞆から手鏡を取り出し見せてくれた。

「俺の目って、赤色だったのかよ」

初めて知った。俺ってもう何も失うものが無くなったような気がするよ。

「拗ねるなって、家に送ってやるから」

「最初からそうしてくれ」

「住所見せて」

住所を見せたらあやめは驚いた。

「どうしたんだ？」

「いや、帰るところが同じで驚いたんだ」

「同じ？」

「そう、同じ」

「そうか、目的地が同じなら行くつぜ」

「權莉、一生のお願い」

しやめは両手を合わせて

「私を止めてくれない」

「はあ、どうしたんだよ」

「それが、パパの私の見る目がね」

そういえば、この前もそういうこと言ってたような気がするよ。

「聞いてみるよ」

「助かる」

その後は本当に助かった、ここの地理が全く分からなかったから家に着くかが問題だったがそれも無くなり簡単に家に着く事が出来

た。

「家に誰かいたっけな」

部屋の前に着いたのはいいが開いてるのか、おそろおそろ開けてみると開いていた。

「ただいま」

中に入った瞬間、クラッカーが鳴った。

「お帰り、お兄ちゃん」

「お帰りなさい」

家族はそこに居た。

「ああ、ただいま」

「あらあら、お兄ちゃん。彼女連れて来たの？」

お義母さんが言った。

「何だと！ お兄ちゃんは彼女が居たのか」

お義父さんは驚いた。

「いつから付き合ってるの？」

妹は質問をしてきた。

「そ、それはいいから」

その後は他愛無い会話をして過ごした。

「あれ、そういえば俺って何しに来たんだっけ」
すっかり当初の目的を忘れていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2295y/>

幼馴染は狼で狂戦士

2011年11月21日03時20分発行